

白門経友会

二〇一四年度を終えて

二〇一四(平成二十六年)も間もなく終ろうとしております。入学試験も無事終えて現在の多摩キャンパスは卒業式を控えても静かな佇まいを見せております。

今年度経済学部では、会報56号で紹介させていただいたグローバルリーダーズプログラム、海外インターシップを開始し成功裡に終了しております。さらに産経新聞社の寄付講座のグローバルコンパスも後期間中は担当学部となり全学部の学生を対象とした授業を実施いたしました。

白門経友会では、二〇一四年度総会を経て、会長に現学部長の谷口洋志教授が就任し、積極的に新たな活動に取り組んで参りました。十一月十四日(金)には新たに公開講演会を開催し高梨明宏常任幹事を講師として「心と頭の良くなるお話し」をテーマとして学生への学習動機づけに役立つ活動として好評でした。さ

らに今年度より会報を原則ホームページに掲載することにより従来より発行数を増やすことになり、本号を年度末ということで発行させていただきます。次年度に向けては、次頁で紹介した二〇一〇年度の卒業生の局(つぼね)幹事による、夢企画―中大学生一人一人の夢を、種として育て上げる活動に本会の活動と連携していく所存です。

以上、会員の皆様におかれましては今後の一層のご支援をお願い申し上げます。(副幹事長佐藤文博)

教員の退職のお知らせ

年度末をもって以下の専任教員の方々が退任されます。在職中の本学へのご尽力を感謝申し上げますとともに今後の一層のご活躍をお祈り申し上げます。

緒方俊雄 教授、田中素香 教授、栗山啓一 教授、杉原正勝 准教授
(以上、定年退職)

原山 保 准教授(自己都合)

また以下の任期制助教の方々が退任されますが、今後のご健闘、新しい場での活躍をお祈り申し上げます。(敬称略) 荒井智行、増田公一、小林和馬、永島 昂

なお、経済学部の卒業式は三月二十五日(水)午後二時 場所多摩キャンパス第一体育館三階アリーナで行われます。また入学式は、四月二日(木)午前十一時より前期と同じく第一体育館で開催されます。

総会のお知らせ

次年度の総会は、開催日を従来の六月の第一週から第二週の土曜日に変更させていただきます。場所等は下記にご案内させていただきます。



第25回 白門経友会 定期総会のご案内

- 1. 日 時 6月13日(土)午後2時開会
(2015年度より6月第2土曜日に変更します。)
- 2. 会 場 中央大学多摩キャンパス
7号館7104教室
- 3. 定期総会 14:00 - 14:30
 - ① 2014年度 活動報告
 - ② 2015年度 活動計画・予算案
 - ③ その他

- 4. 記念講演 14:40 - 16:10
講師 及び 演題 未定
※会場は定期総会と同じです。
- 5. 懇親会 16:30 - 18:30
会 場 生協2階 ふらっと
会 費 OB(卒業5年以上) 10,000円
OB(卒業5年未満) 3,000円
現役学生 1,000円

中大生の「夢」を無駄にさせない。

中央大学「夢」企画

二〇一〇年卒 局 芳曉

この度、白門経友会のメンバーの局(つばね)氏の「夢」企画という活動を本会の活動の一環として連携、協調することになりました。以下、局氏より紹介していただきます。

この活動は、一言で言えば、中大生一人一人の夢を、種として育て上げる活動です。夢に「」がついているのは、【ある特定の】という意味合いを付属したいからでして、一人一人の夢が、誰とも同じではないという意味を持たせています。



【経緯】

一、どうして大学に入学した?

私は二〇〇六年に中央大学へ入学いたしました。中央大学高校からの内部進学でしたので、受験勉強という言葉を知らずに進むようになりまして。元々、何故、中央大学高校を受験したかと申しますと、小さい頃に憧れていた、福田正博さんというサッカー選手が中

央大学のご出身でして、中央大学に入ればあのようなかっこいい姿になれるかなと思いい、願書を提出したわけです。

二、人は忘却の動物だ。

人は、幼い頃の思い出の大半は忘れてしまふものとして、私が抱いた「カッコよくなりたい!」という情熱は、はるか遠く彼方へ飛んで行ってしまいました。そうすると、とても怠惰なもので、授業は寝るわ、先生には反発するわの繰り返しです。ただ敷かれたレールを走るだけの機械的な作業しかこなせない存在になっていました。そんな形で大学二年生まで単位の消化をする毎日でした。

三、人は変化する動物だ。

そんな私の生活にも、光が差し込む時がありました。ただ家と大学の行き来を繰り返している毎日でしたが、世の常の挫折をきつかけに、もう一度「カッコよさ」について考えるようになったのです。そんな私を天の神様は見えてくださって、一人の先輩を通して、本当に自分がやりたいことは何なのか、成長するとは何なのかを学ぶ機会を下さいました。

四、同じ日だが、違う日だ。

それからの学生生活はとてども楽しい毎日でした。同じ授業を受けたとしても、違う授業に感じ取られ、全てが私自身の成長の為に語られている内容に思えたのです。一つ私自身の中に、夢を抱いたことで、こんなにも世界が変わるのだと実感する毎日でした。

五、あの日掴んでくれた先輩に感謝

この中央大学「夢」企画という活動は、あの私を掴んでくれた先輩への感謝を元に行われています。あの時、私が掴まれていなければ、また忘却の動物となり、世に下って行っただでしょう。私はその時の感謝を、後輩に伝えていけるのです。

【活動内容】

一、アンバサダーマーケティングを

利用した「夢」の促進

それでは、中央大学「夢」企画は何をしているのでしょうか。現在、私は広告業界で働いており、インターネットの可能性を研究している身です。その中で、アンバサダーマーケティングという手法があります。これはかつて、レッドブル社が販促で利用した手法です。まず、背景として、インターネットの普及により、テレビやラジオ等のマスメディアでは広告効果が測りにくいということがわかったということがございます。インターネットでは、クリック数や閲覧時間を測れるので、打った広告の効果が具体的に数値化されるのです。そんな中、企業はどのようにマーケティングをするようになったのか、それが自社商品に興味のある特定の人物にダイレクトで販促活動をし、その周りの人物に購買活動を促進する、それがアンバサダーマーケティングです。

二、ソーシャルネットワークシステム

(SNS) が可能にした個人の可視化

現在、大半の方が Facebook や Twitter をやられています。これは一見、交流システムとして便利のように思えますが、よく分別をしなければ、恐いシステムです。というのも、個人情報や機械によって蓄積された結果、その人物に合っているだろうという情報が強制的に広告として波及され、それを閲覧したものはそれが自分に合っているものなのだと思います。買って購買活動に移ることが多いからです。言わば、そこに情報の扇動の可能性が秘められています。同時に、NEVER まとめやスマートニュースに代表されるキュレーションシステムは、セグメントされた情報のまとめサイトとして成り立っておりますが、これも自分が求めていない情報だとして認識しやすく、分別をしなければとても危険な情報の産物なのです。

三、学生に広い視野を

与えなければならぬ

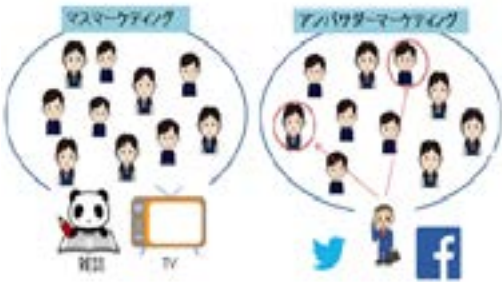
そのような、情報の扇動の可能性が秘められた中、具体的に例を申しますと、就活と検索エンジンに打ち込めば、リクナビやマイナビが出てきます。そうすると就活性は、就活するのであれば、リクナビかマイナビかなという決定を下します。しかし、視野を広げると、身近なところでは中央大学キャリアセンター、八王子市の産業振興課などでも就活の支援は十二分にやっています。そのような事例が多々存在しております。そんな時に、視野を開くためにアンバサダーマーケ

ティンクを利用しております。

四、SNSを用いた

アンバサダーマーケティング

中央大学「夢」企画は、JOHO→ナビというホームページを用いて、中大生の情報プラットフォームを作成しております。そこに集まる中大生の中で、かつて私と同じような境遇にたつた学生を探しております。前段と同じ例を用いれば、「就活したいな、どうしたらいいのだろう」という書き込みがSNSにされれば、中央大学キャリアセンターを用いることで、駄に交通費もかからず、OBOG訪問などもでき、より効率の良い就職活動ができるようになることを伝えてあげること、無暗な就職活動をせずに済むわけですので、無暗な就職活動にも繋がり、全体的に効率の良い就活、中央大学の利点を活用した活動ができるようになります。



五、SNSが可能にした

OBOGの在校生へ関わり

TwitterやFacebookは、今まで環境的要因で果たせなかった在校生とOBOGの関わりを可能にさせました。大学生活を終えると、東京に残る学生ばかりではありません。地方へばらばらに飛んでいき、中央大学からは遠ざかってしまう方たちがいます。ですから、中央大学には数多のOBOGがおりますが、なかなか会話もすることができず、大学生活や社会生活のアドバイスまでOBOGが関わってすることが難しいことが常でした。在校生が進もうと思っている道が、身近な人におらず、盲目的に進まざるを得ないようなシステムになっておりました。そこをFacebookやTwitterは検索をかけるだけで、OBOGが見つかるようにさせたのです。

六、そう思った時、

感じた時が、やるべき時だ。

しかしながら、私が様々な学生と接する中で感じたことは、「夢」を「夢」と思わず、冗談のように吐き捨てるという現状です。何かをしたいと思った時、それが戯言かのようになってしまうのです。極端な例を出せば、例えば、アナウンサーになりたいという子がいたとしたら、目の前にはアナウンサーは端正な容姿をしていないとなれないのではないのか？という現実が立ちはだかっています。そうなるとその子はその夢を戯言としてゴミ箱にいれてしまうのです。

しかし、分かる人は分かっています。アナウンサーの本質を問えば、伝える仕事です。

伝える仕事であれば、幾多にも選択肢がある。それをその時、その瞬間教えてあげるだけで、その子はその「夢」を諦めずに済むのです。

七、その時を探している

ですから、中央大学「夢」企画は、その時を探して動いています。その時を掴むことができれば、大学の万全なるサポートも整っているし、OBOGとしてアドバイスできることがたくさんあります。何より、中央大学に行つたことでやりたいことができなかつたと思つてほしくないのが本質としてあります。かつて私が「カッコよくなりたい」と思つた時に掴んでくださった先輩がいたように、その役割をやらうと思つているのです。

八、そうして動いている子たちがいる

そうして動いている生徒が既にいます。やりたいと思つていたが、実現できずにいた生徒に少しのアドバイスや方法を与えるだけで動きだす現状を私は目の当りにしました。その活動は、随時取り上げて、皆様にも認知して頂けるように致します。今の段階では公表できる内容は御座りませんが、是非楽しみにして頂ければと思います。

【最後に】

マザーテレサは日本を見てこういつたそうです。「日本は物質は豊かだが、心が貧しい。」現在、日本は物質的にはとても溢れている国だと私は感じています。世界の中で経済的に

5本の指にも入っているし、生命の危機もない、他国への援助もできます。でも今、その溢れた国に、人はさまよっています。ですから、人生の先の先まで貫き通せるような「グローバルなビジョン育成メディア」をまずはこの中央大学から始めて、日本の隅々へ広げたいと考えています。

【中央大学「夢」企画】で検索!!!

中央大学 JOHO とナビ 夢をカタチに。BY「夢」企画



え、あの先生がシリーズ⑬

経済学部准教授 伊藤伸介



経済学部の伊藤伸介と申します。二〇一四年四月より中央大学に赴任いたしました。専門は経済統計学で、本学経済学部では、「経済統計」、「入門統計演習」等の講義を担当させていただきます。よろしくお願いいたします。

私の出身地は福岡県福岡市で、小学校時代までは中州・川端地区の近くに位置する博多の「下町」で過ごしていました。中州の中心を通っている那珂川の近くに博多リバレインという大型商業施設がありますが、当時（一九八〇年代前半）は下川端通というアーケード商店街でありまして、小学校の頃は、そこでよく遊んでいたことを思い出します。また、私が住んでいた「下町」のエリアでは、毎年七月に博多祇園山笠が開催されますが、私も小学校時代に山笠に参加したことがあります。私の趣味の一つは、東京散策とりわけ下町や商店街を散策することですが、こういった趣味は、自宅の周辺に商店

街があり、近所の駄菓子屋でモノを買うのが日課であった、私の幼少時代の生活環境と無関係ではない気がいたします。

私は、その後、大学院までの時期を福岡市で過ごしましたが、テレビや新聞等で目にする東京に対してはどこか別世界のイメージを持っていました。初めて東京を訪れたのは、一七歳の頃でしたが、新宿等に代表される街の大きさとあまりの人の数の多さに圧倒されたのを今でも覚えております。その後、独立行政法人日本学術振興会特別研究員(PD)として法政大学日本統計研究所に在籍することになったのを機に、東京に引っ越すことになりました。東京でいざ生活してみると、外から眺めていたイメージとは大きく異なり、東京が人口一千万人以上の大都会であるという一面だけでなく、数多くの大小様々な街の集合体であること、さらには、多摩地域に代表されるような山に囲まれたのどかな風景が東京にも残っていることを実感しました。

ところで、東京に限ったことではないのですが、街にはそれぞれ地域としての独自性があると考えます。例えば、地域の商店街は、単なる商

業店舗の集まりというだけでなく、地域のコミュニティとしての機能を備えており、それが地域の独自性にも寄与していると思われれます。その意味では、大学が街の独自性に果たす役割も小さくありません。学生や教員がその街において単に消費者として機能するだけでなく、より積極的に街に関わるようになれば、その地域の活性化にもつながるような気がします。したがって、地域の発展において、大学と地域の関わり方は重要な意味合いを持つことになると考えています。私は、中央大学に赴任してまだ一年ほどしか経っていませんが、中央大学が多摩地域と今後も関わり合うことによって、多摩地域の独自の街づくりに中央大学がどういった形で貢献できるのかを教員の一人として考えてみる必要があるのではないかとの思いを強く持つております。

他方で、世界は、常にめまぐるしく変化しています。そのせいか、近年、時間の経つのがますます速くなっているような気がします。こうした中で、社会経済の変化を統計データによる数字で把握するだけでなく、統計データから見えない社会の変化、地域における街の変化、さ

らには街で生活する人々の心の変化を自分の目や耳で直接確かめることの必要性を痛感しています。こうした思いを胸に、中央大学の学生ひとりひとりに寄り添うだけでなく、学生の目々の変化を感じながら、中央大学の教育・研究活動に従事し、さらにはこうした活動を通じて、私自身も成長していきたいと思っております。

【編集後記】

夢は現実から飛躍した発想だからこそ魅力的です。他方、夢を現実にするためには堅実な発想が必要です。一人の人が方向性の異なる二種類の発想を同時に行うことは難しい。だからこそ、思いがけない人同士の出会いが大切です。そうした出会いの中でこそイノベーションも生まれます。総合大学である中央大学がそうした出会いの場となることを期待します。濱岡剛(常任幹事)

2015 年 3 月 20 日 第 57 号

発行 白門経友会常任幹事会

編集 白門経友会編集委員会

編集長 鈴木 秀男

〒 192-0393

東京都八王子市東中野 742-1

中央大学経済学部内

URL: www.wg-keiyukai.com

Fax: 042-673-3425